

愛知医科大学学報



ドクターヘリの帰還（リニモツアース）
（関連記事 8 頁）

＝ 第180号 ＝
2025.10月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス
www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

韓国総領事が本学表敬訪問……………	2
愛知県知事との座談会実施……………	2
令和7年度総合防災訓練実施……………	3
事務組織の再編整備……………	4
教授就任インタビュー……………	11
令和7年度オープンキャンパス開催……………	14
2025年度医学部白衣式挙行……………	16
愛知県重症外傷センターに指定……………	23
病院機能評価受審における訪問審査の実施……………	24

金星秀韓国総領事が本学表敬訪問

令和7年8月21日（木）に、駐名古屋大韓民国総領事館の金星秀総領事及び一般社団法人日韓経済文化交流協会の堀江俊通会長が本学を表敬訪問されました。

今回のご訪問は、駐名古屋大韓民国総領事館の設立50周年という節目の年を迎えるに当たり、堀江会長のご紹介により実現したものです。本学からは、祖父江元 理事長及び岩船徹雄法人本部長が出席し、和やかな雰囲気の中、日韓における医療技術を始めとした幅広い分野について、活発な情報交換が行わ



前列左から祖父江理事長、金総領事
後列左から堀江会長、岩船法人本部長

れました。

9月9日「救急の日」に合わせ愛知県知事との座談会実施 ～愛知県と本学における救急医療・災害医療について～

このたび、9月9日「救急の日」に合わせ愛知県と愛知医科大学が日頃から取り組む救急医療及び災害医療への対応をテーマとして、愛知県の大村秀章知事と本学関係者による座談会が実施されました。座談会は、令和7年8月4日（月）午後3時15分から愛知県知事公館において実施され、本学からは祖父江元 理事長・学長、天野哲也病院長及び救急集中治療医学講座の渡邊栄三教授が出席しました。

当日は、救急医療及び災害医療の現状と今後の展望について積極的な話し合いが行われ、令和7年8月に本学が愛知県重症外傷センターの指定を受けたことや医療コンテナの保有、医療人材の育成についても話題にのぼり、大村知事からは医療・教育に対する本学の尽力について御礼の言葉を賜りました。

愛知県でいち早くドクターヘリを導入し、高度救命救急センターの指定を受けている本学では、9月9日の「救急の日」に中日新聞朝刊において全15段カラー広告を毎年出稿しており、本院とドクターヘリをモチーフとしたデザインは、令和3年度に広告賞を受賞しました。今年度は、大村知事との座談会

にて話し合われた内容を掲載致しますので、是非ご確認ください。（https://www.aichi-med-u.ac.jp/su03/su03_2025/su03_2025_01/1235056_7121.html）



記念撮影（左から天野病院長、
祖父江理事長・学長、大村知事、渡邊教授）



座談会の様子

令和7年度総合防災訓練実施

令和7年10月16日（木）午後1時30分から、本学の教職員及び学生を対象とする、南海トラフ巨大地震を想定した総合防災訓練が実施されました。

本訓練は、昨年度と同様に「マグニチュード9.0の地震が熊野灘沖で発生し、長久手市で震度6強を観測した」ことを想定し、病院機能の一部が麻痺しているものの、患者さんの受け入れは行う状態とし、愛知医科大学消防計画・大規模災害対策マニュアル及び病院事業継続計画（BCP）に基づいて行われました。

大学では、尾三消防本部の指導の下、水消火器を使用した消火訓練、応急処置及びエアーストレッチャー搬送などの体験型訓練に加え、医療用コンテナの視察や「災害時取るべき行動」についての防災講義が行われました。また、学生避難誘導訓練では、はしご車を使用した高層階からの救助訓練が行われました。当日は雨風が強まる中、緊迫した状況においても消防隊員が冷静かつ的確に対応する姿が非常に印象的でした。

病院では、大規模災害対策マニュアル及びBCPに則り、第一次・第二次の被災状況報告や、トリアージ訓練、指揮命令系統及び情報伝達フローの確認など、災害時の対応を想定した訓練が実施されました。

法人本部では、ライフライン及び大学施設の被災状況調査、災害備蓄品の搬送訓練を行うとともに、非常用設備の視察を通じて施設設備の再確認が行わ



はしご車を利用した学生避難誘導訓練



病院トリアージ訓練

れました。検証会では、各災害対策室が抱える課題や気づきを共有し、今後の防災対策に活かすための意見交換が活発に行われました。

近年、豪雨や地震などの自然災害が全国各地で頻発しており、災害はいつどこで発生しても不思議ではありません。今回の訓練は、そうした現実を踏まえた実践的な取り組みであり、自らの命を守る意識と行動力の重要性を再認識する貴重な機会となりました。今後も、教職員・学生一人ひとりが防災意識を高め、冷静かつ的確に行動できるよう、引き続き実効性のある訓練に取り組んで参ります。

事務組織の再編整備

近年、大学と病院を取り巻く社会環境は急速に変化しており、大学では、少子化による学生数の減少や教育の質の高度化、大学DXの進展など、新たな課題と機会が生まれています。

一方、病院においても、高齢化社会への対応、医療情報管理のDX加速及び診療報酬制度の変化など、医療提供体制の再構築が強く求められています。こうした変化に迅速かつ柔軟に対応するためには、理事長を始めとする経営陣の方針を的確に実行できる事務組織体制が不可欠となります。

更に、今後予定している人事給与制度改革では、教職員の成果及び貢献度を公正に評価する仕組みが導入される予定であり、その実現に向けても、よりシンプルで機能的な事務体制が求められ、人件費の増加への対応も急務となっています。

これらの背景を踏まえ、大学と病院の事務部門を統合・集約することで、業務の効率化と人的資源の最適配置を進めることとし、事務職員一人ひとりが意識を新たにし、組織全体としてより強靱で柔軟な体制を築いていくために次のとおり事務組織が整備されました。今回の再編整備は始まりの一步であり、今後も状況の変化に応じて臨機応変に対応するものです。

【主な整備内容】

(1) 法人本部組織

- ①法人本部に新たに「広報室／広報課」を設置し、広報業務の集約化を図る。
- ②「財務・管理室」と「資金・出納室」を統合し、「財務管理室」とし合理化を図る。
- ③「施設・建設室」と「管財・契約室」を統合し、「施設管財室」とし合理化を図る。
- ④「人事・厚生室」を分割し、「人事課」と「給与労務課」とし機能の明確化を図る。

(2) 大学事務局組織

- ①事務局に新たに「情報システム部」を設置し、DX推進の加速化を図る。
- ②事務局に新たに「研究推進部」を設置し、研究支援部門の集約化を図る。
- ③「病院事務部」と「医事管理部」を統合し、「病院事務部」とし病院事務部門の効率的な運用を図る。
- ④「医事課」、「医療情報管理課」及び「医療情報システム課」を統合し、「医務課」を設置し、合理化を図る。

令和8年度採用事務職員内定式挙行

令和7年10月1日（水）午後3時から、大学本館701会議室において、令和8年度採用事務職員内定式が挙行されました。

式では、内定者7名に内定証書が授与された後、岩船徹雄法人本部長から愛知医科大学要覧、学報、広報誌たちばな及び病院案内の冊子が配布され、それらを基に建学の精神や沿革、大学・病院の概要について説明がありました。また、天野哲也病院長、新リハビリテーション施設《プロリハ》リハビリテーション及びふるさと納税制度についても紹介がありました。内定者は真剣な表情で耳を傾け、これから始まる社会人としての生活に思いを巡らせている様子でした。締めくくりとして岩船法人本部長から「来年4月、元気にまたお会いできることを楽しみにしています。残り少ない学生生活を満喫し、怪我のないよう健康には十分留意してください」との言葉を賜り、和やかな雰囲気の中で写真撮影が行われ、午後3時30分頃に式は終了しました。



内定者との記念撮影

みにしています。残り少ない学生生活を満喫し、怪我のないよう健康には十分留意してください」との言葉を賜り、和やかな雰囲気の中で写真撮影が行われ、午後3時30分頃に式は終了しました。

令和8年度予算編成方針

I 基本方針

令和6年度決算を振り返りますと、事業活動収入は58,360百万円と前年度比6.4%の伸びを示しました。しかしながら、事業活動支出も61,196百万円と前年度比6.7%増加したため、収支差は△2,836百万円、経常収支差額も△2,873百万円と、2年連続の赤字となり、本学を取り巻く経営環境の厳しさが改めて浮き彫りとなりました。令和6年度の全国31校の私立大学病院のうち20校の大学病院が赤字に陥るなど、診療報酬の伸びが物価上昇によるコスト増に追いつかない構造的な課題は、本学においても例外ではなく、医療材料費、人件費及び光熱費等の高騰が引き続き大きな圧力となっています。令和8年度に予定されている診療報酬改定によって収支改善が図られる可能性もありますが、現時点ではその効果は不透明であるため、更に踏み込んだ緊縮財政とせざるを得ない状況です。

一方で、令和元年度以降に進めてきたメディカルセンターの整備、眼科クリニックMiRAIの開院、外来化学療法室の拡充、経過観察病棟（TACU）や救急・災害管理棟の建設、稼働病床の復床及び新リハビリテーション施設《プロリハ》リハビリテーションの開設など、将来の事業基盤強化のための戦略的投資は一定の成果を示し、令和6年度の医療収入は前年度比4,202百万円（9.4%）の増加となりました。令和5年度から令和6年度にかけての本学の医療収入の伸び率は私立医科大学の中で第2位です。しかし、既に述べたとおり支出増が収入増を上回り、収支改善には至っていません。更に、中央棟も開院から10年以上経過するなど、施設・設備の老朽化対応に伴う財政需要も避けられない状況です。

このような環境の下、令和8年度予算編成においては、医療の安全性と教育の質を堅持しながらも、

「収益性の向上」と「経営資源の効率的活用」に努め、事業活動収支の黒字転換及び繰越支払資金の着実な増加を必達目標とします。そのために、病院全体の病床を一括管理し、効率的な入退院支援と地域連携渉外を組み合わせ実践する病床管理部を設置しました。

また、これまでの国家公務員の仕組みをベースとした年功序列的の制度から、本学の成長に貢献した人に報いる制度へ移行するための新人事・給与制度改革、事務部門の組織再編及び人員配置の適正化など全体最適をキーワードに経営効率化に全学的に取り組むとともに、不採算部門を含めた全事業を聖域なく、例外なく見直し、経営資源の最適化を図りながら資金を確保し、収入に見合う支出予算の編成を目指します。

教育・研究・診療のいずれにおいても、本学の使命を果たしつつ持続可能な成長を実現するために、各部署は「最少の経費で最大の効果」を徹底し、「スクラップ＆ビルド」、「選択と集中」を一層強化した予算編成を行うことを基本方針とします。

II 重点事業

令和8年度予算編成では、重点事業の目的を刷新し、収益性と必要性の両面から整理しました。各事業の収益改善効果やリスク管理、投資回収の見通しを重視し、予算会議における優先順位を明確化します。資金収支では経済変動に柔軟に対応し、繰越支払資金の積み上げ目標を10億円と設定し、事業活動収支では黒字確保を図ります。各編成単位では中長期的視点に立ち、重点事業の目的（全体最適）に沿った計画を立案し、定量的成果が見込める事業を優先します。

<重点事業の目的>

目的番号	重点事業の目的
1	必須・維持（安全性・法令・認可関連）
2	収益向上に直結する投資（投資効果が明確）
3	収益向上に間接的に寄与する投資（教育・研究強化など）
4	費用削減・効率化のための取り組み（IT導入、見直しなど）
5	医療収入、医療材料費、人件費（人事厚生室分）、借入金

ふるさと納税（寄附）及び教育・研究・診療の 基盤整備（施設・設備）事業募金ご協力のお願い

ふるさと納税（寄附）について

長久手市は「ふるさと納税（寄附）制度」を活用し、市内の大学の支援を開始しました。ふるさと納税制度を通じて、実質2,000円の負担（控除上限額は年収と家族構成により各個人異なります。）で、直接「愛知医科大学」を支援いただけます。寄附金は未来の医療人育成を中心に、教育研究活動の推進に資する事業に活用いたします。

ふるさと納税（寄附）の御礼

市からの返礼品はありませんが、大学から心ばかりの御礼を贈呈します。

1 ふるさと納税での寄附金額が1万円以上の方 愛知医科大学オリジナルグッズから1点



キーホルダー



手提げ袋



クリアファイル・
ボールペンセット



フェイスタオル



ワイヤレス充電器



2 ふるさと納税での寄附金額が5万円以上の方 上記1に加え、院内又は学内食堂食事券などから 1点（なお、5万円増すごとに1点ずつ加算して 贈呈します。）



ブルネエズ株式会社と本学共同開発のハンドクリーム



病院レストラン「シトラス」
食事券1セット（定食×2食分）



大学本館1階食堂「オレンジ」
食事券1セット（日替ランチ×5食分）

3 ふるさと納税での寄附金額累計が200万円以上の方

本院でのプレミアム人間ドックの受診



※ふるさと納税の御礼1,2を受ける場合は、同御礼3の寄附金額累計に加算されませんのでご注意ください。

教育・研究・診療の基盤整備（施設・設備） 事業募金について

- ① 募金目的 教育・研究・診療の基盤整備（施設・設備）事業
- ② 募金1口の金額 個人：1万円 法人：5万円
- ③ 税制優遇措置
個人：税額控除制度・所得控除制度のいずれかを選択等
法人：受配者指定寄付金制度等

寄附の顕彰

- ① 広報誌・HP等での寄附者の御芳名（個人名、法人名）
- ② 個人10万円以上（累計）、法人50万円以上（累計）寄附者御芳名（プレート）
- ③ 個人100万円以上（累計）寄附者御芳名（タイル）

寄附の方法

<書面（郵送）>

・本学HPから必要な書類をダウンロード又は資金出納課までご連絡いただければご郵送いたします。

<インターネット>

・本学HPからお申込みいただき、クレジットカード、コンビニエンスストア等を利用するお支払いが可能です。

より詳しい詳細はQRコード
からご覧になれます！



教育・研究・診療の基盤整備
（施設・設備）事業募金



ふるさと納税

●お申込み・お問い合わせ ご不明点がありましたら、お気軽にお問い合わせください。

学校法人愛知医科大学 財務管理室 資金出納課 〒480-1195 愛知県長久手市岩作雁又1番地1

TEL：0561-63-1062（受付時間8：30～17：15 土日祝日を除く）✉ sikin@aichi-med-u.ac.jp

令和7年度愛知医科大学公開講座終了

令和7年9月13日(土)、20日(土)及び27日(土)の計3回にわたり開催された令和7年度愛知医科大学公開講座が終了しました。

本年度の公開講座は、総合テーマを「今こそ知りたい〇〇の話」として開催され、270名の申込がありました。開催期間中には、近隣住民の方を始め、3日間で延べ380名の方々にご参加いただきました。

なお、当日の講演内容をご視聴いただけるように大学ホームページに動画を公開致しましたので、是非ご覧ください。

これからも本学では、地域の方々の健康に役立つ



公開講座の様子

公開講座を企画・運営していきますので、多くの方のご参加をお待ちしております。

愛知医科大学公開講座(長久手市連携事業)

令和7年10月8日(水)午後2時から、長久手市保健センター3階会議室において、長久手市との連携事業として公開講座が開催されました。

今年度は「骨は何歳からでも若返る!意外と知らない食事と運動」と題して、骨粗鬆症・ロコモ・関節疾患センターの中村幸男教授(特任)が講演されました。

骨粗鬆症を防ぐための栄養素や、脚や肩甲骨の体操などのお話がありました。参加者からは、「いろいろな体操を教えていただき、すぐ実行できそうなのが多かった。今日から頑張ろう」という気になり



体操をする様子

ました」などの感想があり、大変有意義な講座となりました。

第216回長久手市火曜会例会の本学開催

令和7年9月9日(火)午前11時30分から、大学本館711特別講義室において、第216回長久手市火曜会例会が開催されました。

火曜会は、長久手市内にある官公庁及び市に関連のある事業所等で組織されています。会員相互の親睦を図り、業務の連絡の円滑化に資し、この地域の発展に寄与することを目的として昭和60年に設立され、本学は設立時から加盟しています。

当日は開催地を代表して、天野哲也病院長から本学の紹介を含めたあいさつがありました。続いて、異動した会員の紹介及び各種報告の後、施設見学が行われました。

施設見学では、令和7年1月に開設した新たなリハビリテーション医療施設《プロリハ》リハビリテーションを視察し、リハビリテーション医学講座の尾川貴洋教授から、施設・設備の内容に加え、本院におけるリハビリテーションの特徴等について、説明がありました。



本学を紹介する天野病院長(中央)



《プロリハ》施設を紹介する尾川教授(中央)

わくわく体験リニモツアーズ2025 「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、 考えてみよう！」開催

東部丘陵線（リニモ）沿線の魅力を満喫し、学び楽しむ小学生対象のイベント「わくわく体験リニモツアーズ2025」が、愛知県都市・交通局交通対策課を事務局とする東部丘陵線連絡協議会の主催により開催されました。本イベントは、リニモ沿線施設での体験講座を通じて、子どもたちの環境学習や社会学習等の効果が期待されるものであり、本学も体験講座の実施施設の一つとして同事業へ協力しています。

本学では、令和7年8月21日（木）に「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、考えてみよう！」と題した体験講座を午前の部と午後の部として1日に2回開催し、多くの小学生及びその保護者にご参加いただきました。体験講座では、ドクターヘリの見学会、ドクターヘリに関する講演会や質疑応答が行われ、講演会では、本院のフライトドクターとフライトナースによる講演がクイズ形式で行われました。ドクターヘリや仕事内容についての説明に加え、普段聞くことができない医療現場での話に対し子どもたちからは積極的に手が挙がり、楽しみながら救急医療を学んでいただくことができました。

ドクターヘリの見学会では、機体の迫力を間近で感じ、多くの参加者が機体との記念撮影を行いました。また、フライトナースたちが現場に駆けつける際に背負うリュックの重さに子どもたちは驚いていました。午前の部、午後の部ともに体験講座中にド



講演会



ドクターヘリ見学会

クターヘリの出動要請があったため、救助へ向かうためのヘリ離陸や帰還時に着陸の様子を見学することができ、緊迫した医療の現場を体感していただきました。

最後には、参加者全員に大学オリジナルグッズ（ドクターヘリの特製キーホルダー）を配付し、体験講座は盛況のうちに終了しました。

令和7年度大学コンソーシアムせとカレッジ講座開催

令和7年8月22日（金）午前10時から、パーティセとにおいて、大学コンソーシアムせとカレッジ講座「今日からできる！『健口習慣』のススメ～オーラルフレイルを防ごう～」が開催されました。本講座では、ヘルスケア共創センター地域連携部門の二村純子講師と志水己幸助教が講師を務め、口腔機能の重要性やオーラルフレイル予防について分かりやすく解説しました。

「かむ」、「のみ込む」、「話す」といった口の機能は、心身の健康に深く関わっています。講座では、誤嚥の仕組みや口腔機能のセルフチェック方法を始め、口腔体操・歌体操・早口言葉など、日常生活に取り入れやすいトレーニングを参加者の皆さんと一緒に体験しました。

当日は46名の参加があり、終始和やかな雰囲気の中で楽しく学びを深めることができました。参加者



カレッジ講座の様子

からは、「健口知識を深める良い機会になった」、「講義と実践が交互にあり、楽しく参加できた」等の感想がありました。

今後も地域の皆さまの健康づくりを支える講座を企画して参ります。

大学コンソーシアムせと「大学生によるまちづくり活動」開催

令和7年8月10日（日）にパーティセと4階マルチメディアールームにおいて、本学が加盟する大学コンソーシアムせとの助成金事業「大学生によるまちづくり活動」が開催されました。

本事業は、大学生の成長及び自立を促し、その活動成果が地域社会の発展に資することを目指しており、本学の学生ボランティアサークルHIAMU（Heart in Aichi Medical University）が参加しています。今年度は小学生を対象に、医療系学生であることを活かした独自性のあるイベントが企画されました。子どもたちには、医療、健康及び科学に興味を持ってもらうことを、学生には、子どもたちとの交流を通じて、医療人にとって重要な「多様な価値観」や「柔軟なコミュニケーション能力」を養うことを目的として運営されました。

当日は、HIAMU小児ボランティア班・班長の柴田真彦さん（医学部2学年次生）を中心に、両学部 of 学生による「射的」、「手洗いバトル」、「スライム作り」、「ビンゴ大会」など、子どもたちの知的好奇心を刺激し主体的に関わることでできるゲームが行われました。

ゲームを通じて、子どもたちは楽しみながら医学、健康及び科学に触れることができました。参加後の



スライム作りの様子



手洗いバトルの様子

アンケートでは、子どもたちから「スライムが固まる様子が楽しかった」、「知らないウイルスや細菌について学べて良かった」等の感想がありました。

第14回東海地区大学輸出管理担当者ネットワーク連絡会議開催

令和7年8月27日（水）午後1時30分から、大学本館7階会議室等において、第14回東海地区大学輸出管理担当者ネットワーク連絡会議が開催されました。今回は、本学、名古屋大学、三重大学を幹事校として、東海地区を中心とする18大学から45名が参加し、輸出管理に関わる最新情報の共有と大学間の連携強化を目的に活発な意見交換が行われました。

当日は、佐藤元彦副学長（特命担当）による開会あいさつの後、経済産業省貿易経済安全保障局の梅村知史課長補佐による「大学における安全保障輸出管理について」と題した講演が行われ、制度の動向や大学に求められる対応について具体的な解説がありました。

続いて行われたグループディスカッションでは、



グループディスカッションの様子

各大学の課題及び取り組み状況を共有し、実務的な視点から建設的な意見交換がなされました。最後に、各グループの代表者が討議内容を報告し、名古屋大学の宮林毅特任教授の開会あいさつをもって、盛会のうちに終了しました。

令和7年度SD「産業医講演会」実施

令和7年10月2日（木）午後4時から、大学本館たちばなホールにおいて、「見えないスキルに名前をつける：働く人の行動科学入門～あなたの『なんとなく』は、職場の資産に～」をテーマとした産業医講演会が開催されました。【写真】

講演会では、本学の産業医である衛生学講座の鈴木孝太教授から、自分の中にある暗黙知を形式知にすることの重要性や、無意識の行動に社会心理学などの理論を一致させることで得られるメリット、生成AIとの対話による自分の思考や感覚の形式知化などについての説明がありました。

講演会後のアンケートでは、「鈴木教授の講演は勉強になることが多く楽しい時間でした。来年度も継続していただけたら、また参加したい」、「生成AIの使い方も、これまで頼り過ぎていたところがあったと反省し、使い方を工夫してみようと思いま



した」、「暗黙知を形式知にしていけるように、紹介された理論を調べてみたい。自分のことをもう少し客観視できるようにしていきたい」などの感想が集まりました。

※ SD（スタッフディベロップメント）：教職員に研修の機会を提供する等の取り組み。

教授就任インタビュー



内科学講座（消化管内科）・教授

なかむら まさなお
中村 正直

— 教授就任に当たっての抱負を聞かせてください。—

令和7年10月1日付けで春日井邦夫教授の後任として内科学講座（消化管内科）の教授を拝命致しました。これまでの礎を大切にしつつ、更なる発展を目指して参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、平成9年に岐阜大学医学部を卒業し、名古屋大学関連病院勤務を経たのちに名大病院で21年間勤務致しました。在任中の平成23年から24年にはロンドンに臨床研究留学し、令和4年4月から令和7年9月まで光学医療診療部部長を務めました。今までの経験を今後に繋げられればと思います。

私も消化管内科は、①炎症性腸疾患診療、②早期消化管癌の内視鏡治療、③食道運動機能障害、食道狭窄に対する内視鏡治療を三柱として展開しています。これらを基盤に教室一丸となって消化管診療を推進し、地域の健康を支える医療を実践して参ります。そして頼もしい先輩であられる内科学講座（肝胆膵内科）の伊藤清顕教授と連携し、次世代を担う消化器内科医の育成に尽力して参ります。

研究面では、指定難病である潰瘍性大腸炎の原因機序に迫る研究を進めております。患者数は年間約1万人のペースで増加しており、今後も更なる増加が見込まれます。若年での発症が多く、就学や就労が叶わず苦しむ患者さんも少なくありません。そうした方々の希望ある未来に繋がるような研究成果を挙げられるよう努めて参ります。

スタートしたばかりの若い医局ではありますが、私は素晴らしいメンバーに恵まれました！共に力を合わせて前進して参りますので、どうかご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

— 現在の研究分野に進まれたきっかけを教えてください。—

研修医として勤務していた中規模の総合病院では、消化管検査を担う人員が限られており、研修2年目から胃透視や内視鏡検査を継続的に担当する機会をいただきました。その経験を通じて内視鏡診療の奥深さに魅了され、特に大腸疾患への関心が高まりました。

潰瘍性大腸炎やクローン病は、世界中で多額の研究費を投じて研究が進められたにも関わらず、病因は未だ明らかではありません。日々の診療では、こうした病気に苦しむ患者さんから「いつになったら治りますか？」と尋ねられることが多くあります。寛解維持が精一杯で“完治”に至らない現状に、医療者としての無力さを痛感する一方で、この現実を変え、希望ある未来を届けたいという想いが私の研究への原動力となっております。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

学生時代は、自分の心が最も自由に動き、何かに夢中になれる貴重な時間です。どうかその時間を大切に、「これだけはやりきった」と胸を張って言える経験を積んでください。私自身、臨床に励んでいた時期に、ロンドン臨床研究留学に挑戦致しました。家族同伴での渡航は簡単ではなく、多くの苦労もありましたが、異なる環境の中で得た経験は、医師として、そして人としての視野を大きく広げるものでした。振り返れば、あの挑戦が今の自分を支える源になっています。皆さんにも、ぜひ“自分の限界を少し超える経験”をしてほしいと思います。迷いながらも挑戦した日々こそが、きっと将来の皆さんの力になるはずです。

オフショット



家族の癒し担当



歯科口腔外科学講座・教授

ふるはし あきふみ
古橋 明文

— 教授就任に当たっての抱負を
聞かせてください。—

令和7年10月1日付けで、歯科口腔外科学講座の教授を拝命致しました。本講座においては私が第三代の教授となります。「売り家と唐様で書く三代目」という江戸時代の川柳にあるように三代目で没落することなく、むしろ「ホップ・ステップ・ジャンプ」と飛躍して参ります。どうぞよろしくお願い致します。

医学部における歯科口腔外科の役割は何かを考えると、私は常に二つの視点を意識しています。一つ目は、地域歯科医療における高次医療機関としての役割です。歯科診療所での加療が困難な疾患、特に口腔外科手術を必要とする患者さんに対して、本院で安心して治療を受けていただけるように、地域歯科医療機関との連携を密に行うことが我々の重要な務めです。本院では、施設面の充実に加え、関連する医科診療科の支援にも恵まれており、高度で幅広い口腔外科疾患への対応が可能となっています。二つ目は、医科大学病院における歯科医師としての専門性を生かし、周術期の口腔管理、化学療法時の口腔粘膜炎への対応及び摂食嚥下機能への支援など、医科診療をサポートすることです。このように地域と医科の信頼の架け橋として、より良い医療を提供し、未来へと繋がる歯科口腔外科を築いて参ります。

— 現在の研究分野に進まれた
きっかけを教えてください。—

本院歯科口腔外科での初期臨床研修中、ほんやりとしか将来を考えていなかった私は、当時の山田史郎教授から社会人大学院への進学を勧められました。そこで出会ったのが睡眠医療の世界であり、閉塞性睡眠時無呼吸に対する口腔内装置治療の奥深さや、医科との連携の重要性を学びました。特に、専門領域の異なる多くの方々と出会い、話を交わすことは今に繋がる貴重な経験となりました。下顎を前方位で保持する口腔内装置（マウスピース）により上気道を拡大し睡眠時無呼吸を改善しても、対症療法に過ぎず根本治療にならないことに、徐々にもどかしさを感じるようになった私は、顎変形症治療をベースとした口腔外科的介入を考えるようになりました。睡眠時無呼吸の一因に顎の小ささがあり、顎を拡大する顎外科手術は根本治療となる可能性があります。今後は、これらの分野の更なる発展に貢献して参ります。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

皆さんは、日頃、口腔という領域に興味をもつことがありますか。あまり考えることはないかもしれませんが、口腔は食物を摂取する消化器系の入口です。咬合・咀嚼・嚥下といった食物摂取の基本を知することは全身の栄養管理を行うためにとても役立ちます。また、口腔ケアの不十分さが誤嚥性肺炎の原因となること、糖尿病など、多くの全身疾患と口腔の健康は密接に関係しています。医科と歯科が互いの専門性を理解し、連携して患者さんを全身的に診ることで、より質の高い医療を実現できます。将来、皆さんと共にそのような医療を築いていけることを心から期待しています。



医療安全管理室・教授

ふじもと かずろう
藤本 和朗

— 教授就任に当たっての抱負を
聞かせてください。—

令和7年8月23日付で医療安全管理室の教授を拝命し、身の引き締まる思いであります。医療は人の生命と尊厳を守る営みであり、安全はその根幹です。医療安全は単なる事故防止に留まらず、組織文化の醸成や人材育成、患者さんとの信頼構築に直結します。私は、これまでの臨床、研究及び教育に携わる中で得た経験を活かし、多角的な視点から安全の向上に取り組む所存です。

医療は科学的根拠に支えられると同時に、人々との信頼や共感に基づく営みであり、患者さんはもちろんのこと、医療従事者もまた守られるべき存在です。安全な医療を実現するためには、診療科や職種を超えた協働、そして現場で働く医療従事者が安心して挑戦し、学び続けられる環境が欠かせません。

医師、看護師、薬剤師を始め、多職種が互いに尊重し支え合うチーム医療の実践を目指したいです。またその教育においては、知識や手技の習得だけではなく、チームで支え合い、失敗から学ぶ姿勢を育てることに力を尽くそうと考えております。

— 現在の研究分野に進まれた
きっかけを教えてください。—

研修医の時に、厳しい状況でも楽しそうに、チームを引っ張りながら明るく働く心臓外科医に、本当

に痺れ、そのプロフェッショナルを目指しました。私は10年間アメリカに留学し、その内8年間は基礎研究、残る2年間は米国の臨床に従事しました。世界最先端の技術とチーム医療を学んだ経験は、医師としての姿勢と自身の人生観を大きく変えました。

帰国後は名古屋大学で補助人工心臓、心臓移植施設の立ち上げに参画しました。手術手技に全集中したいと思い関連病院へ赴任した中で、極度に視力が低下し絶望を経験しました。もがきながらも何らかの形で自分の様々な経験を還元したいと願い、医療安全のプロフェッショナルへと舵を切りました。全力で明るく元気にチームを牽引して参ります。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

学生時代は硬式野球部で野球以上に麻雀に熱を入れておりました。心臓外科医となり留学して基礎研究から臨床、更に心臓移植と挑戦することの楽しさと大切さを知りました。今回、医療安全の分野でも経験を活かし、何事も楽しむ姿勢を忘れず歩み続けるつもりです。挑戦には代償、挫折のリスクはついて参りますが、無個性で平凡で退屈と考えていた私から皆さまに人生の味わいと楽しみ方は無限だと伝えられたいと思います。

オフショット



愛犬とのふれあいでホックリ

令和7年度オープンキャンパス開催

令和7年8月2日（土）・3日（日）の2日間にわたり、令和7年度オープンキャンパスが医学部・看護学部合同で開催されました。

非常に暑い中での開催となりましたが、両日併せて医学部は469組1,012名、看護学部は546組1,053名と大変多くの参加者にお越しいただき、活気のあるオープンキャンパスとなりました。

「ここがわたしの、夢の入り口」というコンセプトを設定し、大学本館を中心に受験生に興味を持ってもらえるよう、華やかな装飾が施されました。これは、正門という大学を象徴するモチーフから発想し、将来の可能性を拓く前向きなイメージとオープンキャンパスのデザインとを連動させて表現した意匠となっております。

このコンセプトのとおり、来場者からはキャンパス内の施設見学、模擬講義及び各種実習を体験できるイベントや、教員・在学生との触れ合いを通して大学の明るく活気のある雰囲気を直接体感することができ、オープンキャンパスに来なければ知ることのできない様々な体験ができたと多くの方々から好評をいただいております。

また「オープンキャンパス特設サイト」では、大学・学部紹介動画や施設紹介、ドクターヘリ紹介等遠方等で当日来場することができない受験生に対しても本学の魅力を発信しています。



コンセプトデザイン

◆医学部

＜来場型＞

- ☆学部長あいさつ・入試説明
- ☆教職員による個別相談会
- ☆学生との交流コーナー ☆国際交流コーナー
- ☆模擬授業～医学部の講義を体感してみよう～
- ☆脳の標本観察 ☆実習体験

＜Web型＞

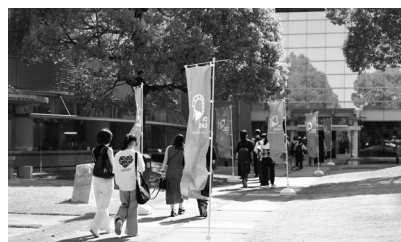
- ☆愛知医科大学医学部入試過去問解説講座

◆看護学部

- ☆学部長あいさつ・学部紹介・入試説明
- ☆在学生によるキャンパスツアー
- ☆体験演習 ☆体験講義
- ☆相談会コーナー（学生・教職員・卒業生）
- ☆国際交流 ☆大学院体験
- ☆フライトナースによる講演会
- ☆保護者様向け企画

◆両学部共通

- ☆学食体験 ☆ドクターヘリ見学



オープンキャンパス
ここがわたしの、夢の入り口



ACSISによるシミュレーターを使用した
医学部実習体験



学生との交流コーナー

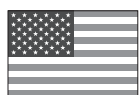


在学生によるキャンパスツアー

【参加者の皆さんからの感想】

- ・実際に大学を見ることで、ホームページ等の情報以上に、様々な情報を知ることができました。実際に通う先輩方から学生生活の様子も知ることができ、ここで学びたいという気持ちが更に強くなりました。
- ・実習体験ではスタッフの方々の詳しい説明で、脈の測り方や心肺蘇生法を学びました。体験の合間に、医学的知識や大学生活のリアルを教えていただき参考になりました。
- ・小学生の頃から看護師になりたいという夢があり、フライトナースの方のお話を生で聞くことや、迫力のあるドクターヘリを間近で見学することができ貴重な体験をすることができました。
- ・在学生や教職員の方々がとても親切に接してくださり、実際の授業や演習を体験する中で、大学生生活の具体的なイメージを持つことができました。

国際交流



アメリカ合衆国南イリノイ大学医学部教員来学 ～更なる相互交流の発展を目指して～

本学医学部では、平成17年3月から南イリノイ大学(Southern Illinois University School of Medicine: SIU)との学術国際交流を行っており、教員の招聘や相互に学生の派遣・受け入れを行っています。

例年本学からは、5学年次生を対象とした臨床実習に参加するコースと、3・4学年次生を対象としたSIU 2年生カリキュラムを受講するコースの二つのコースへ学生を派遣しています。令和7年10月29日(水)・30日(木)の2日間にわたり、この学生の受け入れに多大なご協力をいただいているSIU内科学講座のMartha Hlafka准教授(教育担当副部長, 臨床実習(クラークシップ)責任者)及び臨床精神医学講座のAyame Takahashi准教授(児童・思春期精神医学フェローシッププログラム責任者)が来学され、本学の視察や学生・教員との交流が行われました。

今回の来学では、祖父江元 理事長・学長、笠井 謙次医学部長への表敬訪問や、来学された先生方による「Formative Feedback in Competency-Based Medical Education」及び「Marijuana and the Adolescent Brain」についての講演が行われました。SIUでは、先駆的な教育カリキュラムの開発と充実した医学教育システムの整備を重点的に行っており、本講演では、これらに関する知識や理解を深める良い機会となりました。

また、SIUへ派遣予定である医学部5学年次生に対するケースプレゼンテーションだけでなく、医学



学長表敬訪問

部3・4学年次生に対しても、SIUで行われているPBL(問題立脚型学習)や医療英語の指導が実施されました。指導後には、派遣学生との懇談会も行われ、最初は緊張していた学生も、積極的に先生方とコミュニケーションを図り、親睦を深めることができました。派遣に向けての新たな学修課題を形成できる良い機会となり、モチベーション向上へと繋がりました。

例年のSIU教員の来学は、両大学の相互交流の更なる発展に大いに役立っています。医学部では今後も引き続き学術国際交流協定校等の開拓に努め、更に多くの学生に海外留学へのチャンスを与えるとともに、海外大学の学生の受け入れを通して、学生が国際的な視野を広げる一助になるよう一層努力して参ります。

2025年度医学部白衣式挙行

令和7年10月11日（土）午前10時から、大学本館たちばなホールにおいて、2025年度医学部白衣式が挙行されました。

白衣式では、共用試験（CBT、臨床実習前OSCE）に合格し、臨床実習への参加が認められた医学部4学年次生に対して、「臨床実習生(医学)」(英語表記：Clinical Clerkship Student)の称号が授与されました。学生は新しい実習衣を身に着け、白衣式に臨みました。

初めに、笠井謙次医学部長から、臨床実習に臨む者としての心構えについて話があり、代表者へClinical Clerkship Student証書が授与されました。続いて、鈴木耕次郎教務部長を始め、6名の臨床医学系教授から学生一人ひとりにClinical Clerkship Student証書とワッペンが授与されました。

次に、祖父江元学長、天野哲也病院長、井上里恵看護部長から祝辞があり、愛知医科大学同窓会愛橋会の福澤嘉孝理事長、昨年度に本学を卒業し研修医1年目の富田明日香医師からも激励の言葉がありました。



森内さんによる学生宣誓

最後に、4学年次代表の森内理子さんが学生宣誓文を読み上げました。この宣誓文は、これから臨床実習に臨むに当たっての心構えなどを学生全員で話し合って作成したものであり、自分たちで考え、言葉にすることで、自らの臨床実習への意識付けや行動規範とするものです。

白衣式終了後は、たちばなホール壇上において記念撮影をし、学生それぞれがこれから始まる臨床実習に向けて、決意を新たに次のステップを踏み出しました。

令和7年度臨床実習前OSCE実施

令和7年8月30日（土）・31日（日）に医学部4学年次生を対象とした医学生共用試験臨床実習前OSCEが実施されました。今年は、30日に「頭頸部診察」、「神経診察」、「救急」、「全身状態とバイタルサイン」、「基本的臨床手技」、「感染対策」を、31日に「胸部診察」、「腹部診察」、「四肢と脊柱診察」、「医療面接」など全10課題が行われました。多くの評価者、模擬患者（本学模擬患者会、他大学学生ボランティア及び職員）や事務職員運営スタッフの皆さまにご協力いただき、無事に終えることができました。

臨床実習前OSCEは、令和5年度から試験が公的

化され、合否判定基準を含めた試験運営が全国統一基準で実施されています。CBTとともに、本試験に合格することが臨床実習に進むために必要となるだけでなく、医師国家試験を受験する際の要件にもなっています。

OSCEの実施に当たり、毎年、評価者不足が問題となっており、新たな認定評価者の養成が急務です。各講座におかれましては引き続きご協力の程宜しくお願い致します。

大学の未来を語る会開催

令和7年8月26日（火）午後5時30分から、大学本館第2会議室において、大学の未来を語る会が開催されました。

本会は、学生8名と祖父江元 学長、笠井謙次医学部長、宮本淳学生部長、鈴木耕次郎教務部長が、今後の教育、研究及び本学の魅力について、建設的な雰囲気の中で議論することを目的としています。メインテーマを「本学の未来・医療、自分の未来」とし、教育、医療、学生生活など様々な内容の意見交換が行われ、終始和やかな雰囲気の懇談会となりました。

参加した学生からは、「様々な意見が出ていた。相反する意見もあって個人差が大きいことが分かった」、「思ったより気楽な雰囲気で安心しました」といった感想がありました。今後もこのように、学生から率直な意見を聞く場を設け、より良い大学づくりに努めて参ります。



参加者との記念撮影



懇談する様子

令和7年度医学部FD開催

近年は診療参加型臨床実習の充実が求められており、FDにおいては、学生が診療チームの一員として実際に診療業務を分担しながら、医師として必要な知識や思考法、技能及び態度を身に付けることを目的としています。

令和7年7月30日（水）午後5時30分から、大学本館711特別講義室において、「臨床実習教育」をテーマとする第4回医学部FDが開催されました。第4回は、診療参加型臨床実習の概説後、各診療科での取り組みについての共有が行われました。発表した診療科からは、実習を熱心に取り組むことにより、医局説明会など医局行事に参加する学生が増えてきたとコメントがありました。これが将来の入局者に繋がることを期待します。

第5回は9月11日（木）午後5時45分から、大学

本館301講義室において、JACME 2 巡目受審（令和8年10月予定）に向けた医学教育分野別評価の年次報告書作成に関するFDが開催されました。自己点検評価書の作成、コアメンバーによるブラッシュアップなど、受審までに今後すべきことについての共有が行われました。その後、領域ごとに分かれて、各領域で自己点検評価書を作成する際の役割分担及び根拠資料の集め方についての確認が行われました。

第6回は9月19日（金）午後5時30分から、大学本館303講義室において、筑波大学の船越高樹准教授をお招きし、「合理的配慮支援の概要」をテーマに開催されました。他大学の事例を参考に対処法を考えることや、事例を積み重ねていく大切さなども教えていただき、障がいのある学生への支援についての理解を深める機会となりました。

食中毒予防講習会開催

令和7年10月27日（月）午後4時15分から、大学本館たちばなホールにおいて、医大祭で飲食物の提供を行う模擬店に関わる学生を対象とする「食中毒予防講習会」が開催され、両学部合わせて245名の学生の参加がありました。

本講習会は、食品の取り扱い方法の理解と、食中毒予防に対する意識の高揚を図ることを目的に開催しています。瀬戸保健所環境・食品安全課食品指導グループの水野様を講師にお招きし、食中毒予防の3原則の重要性と、予防方法についての説明・事例紹介等があり、模擬店出店時の衛生管理のポイントについてスライドを用いてご指導いただきました。

参加した学生からは、「意外とリスクがあることを知り、気をつけて調理しようと思いました」、「気



講習会の様子

を引き締め直す良い機会となった」、「楽しい医大祭として終われるように、楽しむだけでなくしっかりと責任を持って行うべきだと再確認できた」などの感想がありました。

学術国際交流協定大学への看護学部学生留学体験記

看護学部では、タイ王国マハサラカム大学看護学部と教員・学生の交流を含む包括的な相互交流を行っています。令和7年8月に看護学部学生5名が留学しました。短期留学を終えた学生の体験記の一部をご紹介します。

マハサラカム大学短期留学

看護学部3学年次生 林 香織

将来、地域で暮らす人々を支える保健師として働きたいという夢があり、学生のうちに異文化に触れ経験を広げたいと考え、短期留学に参加しました。

本年2月の留学生受け入れボランティアで交流を深めたタイの学生と6か月ぶりに今回現地で再会できたときには互いに抱き合って喜び合いました。観光では得られない国境を越えた友情や、人と人との繋がりを実感できたことは大きな財産です。

また、現地の大学や病院でも温かく迎えていただき、短期間ながら多くの学びを得ました。健康教育や生活訓練には、退院後の生活を意識した工夫がなされていました。また、緩和ケア病室に仏画が飾られている様子からは、医療と宗教・文化が深く結び付いていることを実感しました。更に、タイ古式マッサージも体験することができ、タイではマッサージが単なるリラクゼーションではなく伝統医療として位置付けられていることに、とても驚きました。これらのことから、制度や技術だけではなく、多様な



マハサラカム病院での記念撮影（左から8番目）

背景を尊重する姿勢が医療には欠かせないことを学びました。

英語が苦手と不安もありましたが、先生方や仲間の支えのおかげで安心して挑戦できました。次に友人に会うときにはもっと会話できるよう語学学習にも引き続き励みたいと思います。今回の留学で得た気づきや出会いは、私にとってかけがえのない経験となりました。

ヘルスケア共創センター 地域連携部門 おやこ防災・ちいき防災はじめてのいっぽ ～フェイズフリーってなに？～への参画

令和7年8月26日（火）午前10時から、長久手市南小学校区共生ステーションにおいて、親子防災活動サークル「子づれ備災クラブ」主催のイベント「おやこ防災・ちいき防災はじめてのいっぽ～フェイズフリーってなに？～」が開催され、看護学部のボランティア学生8名と部門員5名が参加しました。本イベントには、スタッフを始め子どもから高齢者まで幅広い年齢層の方々約70名の参加がありました。

当日は防災講演会や避難所トイレの紹介、AED及び無線機の体験等が行われました。また、学生が主体となって来場者に声をかけ、ローリングストックを題材とした自作カードゲームや防災ゲーム（家まですごろく）が行われました。参加者からは、「楽しかった」、「今すぐ準備して備えたい」などの声が寄せられました。



ローリングストックカードゲームをする様子

本イベントには、長久手市役所職員、市内市民活動団体及び防災士が参加しており、今後も多様な団体と協働交流する機会において、学生の参画と学びを促進しながら、地域のニーズに即した健康支援活動を行って参ります。

ヘルスケア共創センター 生涯学修支援部門 臨床看護セミナー開催

令和7年9月20日（土）に、本院NP部の森一直部長（診療看護師(NP)、看護学部教授(特任)）及び看護キャリア支援室の上野沙織看護師（急性・重症患者看護専門看護師）による臨床看護セミナー「看護師の観察力を磨く！異常の兆候を見抜くポイント」がオンライン形式で開催され、県内外から53名が参加しました。

本セミナーでは、患者の異常な兆候を見抜くために必要な、循環と呼吸のアセスメントにおいて何が重要なのか、分かりやすい例えを用いた講義が大変好評でした。臨床現場で活躍する高度実践看護師の講義に対して、「所々に先生方の経験に基づいた話があり、現場で働く者として大変共感ができて、理解しやすい」、「患者への説明や受診を促す指標の表



右から、森部長及び上野看護師

現として活用できそう」などの感想が寄せられました。

新人から熟練看護師まで共に学べる有意義なセミナーとなりました。

ヘルスケア共創センター 生涯学修支援部門 臨床倫理学習会開催

令和7年10月25日（土）午後1時から、ヘルスケア共創センター生涯学修支援部門の臨床倫理学習会がオンライン形式で開催され、県内外から57名の参加がありました。杏林大学保健学部角田ますみ准教授を講師にお迎えし、「不確実性が高い状況下でのACP（アドバンス・ケア・プランニング）実践－エフェクチュエーションで考える意思決定支援－」と題して、ACPの基礎を振り返りながら、変化する状況に柔軟に対応しつつ、意思決定を進める「エフェクチュエーション」という考え方を取り入れた、新しいACPの実践についてご講義いただきました。

参加者からは、「エフェクチュエーションの活用について、事例を使って分かりやすくご講義いただいた」、「業務上の課題についてもエフェクチュエーションを活用した例の紹介があったことで、一つひとつの概念に対する理解が深まった」等の感想がありました。

本学習会を通して、ACPの現状、医療従事者に生じやすいACPに関する誤解、各職種のACPにおける役割及び将来が不確実な状況でエフェクチュエーションの五つの原則を活用したACPの実践など、多くのことを学ぶ機会となりました。

令和6年度看護学部・看護学研究科

ベスト科目賞及びベストティーチャー賞表彰

令和6年度の看護学部・看護学研究科ベスト科目賞及びベストティーチャー賞が決定しましたので紹介します。

ベスト科目賞は、学生が行う各科目の授業評価アンケート結果により、教育方法や教育内容等が高く評価された科目を担当する教員を表彰するものです。また、ベストティーチャー賞は、学生の投票により、最も優れた講義や演習・実習指導を行った看護学部教員を選出し、表彰するものです。

今後も授業改善に向けた取組みの一環として、評価の高い教員を顕彰し、学生の教育意欲の向上と大学教育の活性化を図ります。

ベスト科目賞及びベストティーチャー賞表彰者は、次のとおりです。

大学院

○看護学研究科

ベストティーチャー賞

・山中 真（看護管理学領域・教授）



出席者による記念撮影

学部

○看護学部

ベスト科目賞

・山中 真（看護管理学領域・教授）

・山幡 朗子（基礎看護学領域・准教授）

ベストティーチャー賞

・山本恵美子（基礎看護学領域・教授）

令和8年度大学院医学研究科入学試験及び 第83回論文博士外国語試験実施

令和7年10月3日（金）午前10時から、本学本館711特別講義室において、大学院医学研究科入学試験第1次募集及び第83回論文博士外国語試験が実施されました。合格者数は、大学院医学研究科入学試験が13名、論文博士外国語試験が2名となりました。

大学院医学研究科では、入学定員に満たないことから、第2次募集を予定しています。

これまで社会人入学制度や学納金減免制度の拡充などを行い、大学院教育を受けやすい環境を整えてきましたので、研究意欲の高い方が多数応募されることを期待しています。

なお、大学院医学研究科入学試験第2次募集及び第84回論文博士外国語試験は、令和8年1月30日（金）に実施予定です。

令和8年度大学院看護学研究科(修士課程・博士後期課程) 入学試験実施

令和7年9月5日（金）・6日（土）に令和8年度大学院看護学研究科（修士課程・博士後期課程）入学試験が実施されました。合格者は、修士課程が13名、博士後期課程が3名となり、入学定員に満たないことから第2次募集を予定しています。

本研究科では、これまで医療等の現場で活躍されている方々が、退職したり休職したりすることなく

学べるよう、平日の夜間や土曜日などにも講義及び研究指導を行っています。更に、勤務や育児などの事情により標準修業年限での履修が困難な学生を対象とした「長期履修制度」を導入し、社会人がより学びやすい教育環境を整えています。（修士課程 高度実践看護師(診療看護師[NP])コースを除く）

看護学部同窓会企画マスコットキャラクターデザイン決定

令和7年10月25日（土）午前10時から、看護学部棟N203講義室において、看護学部同窓会理事会が開催され、同窓会の“顔”となるマスコットキャラクターデザインが決定されました。春の募集開始以降、多くの皆さまにご参加いただき、新しいシンボルが誕生しました。

令和7年4月から7月末まで、同窓会会員及び学内関係者にデザインを募り、14点の応募がありました。決定したキャラクターは、看護の精神（癒し・支え合い・安心感）をやわらかな色合いとシンプルな造形で表現し、グッズやLINEスタンプなど多様な媒体に展開しやすい汎用性が高く評価されました。加えて、Web投票（投票総数188件）で最多得票を獲得し、最も多くの支持を得たことから、同窓会のシンボルとして相応しいと判断されました。キャラクターは同窓会の広報物やイベント、記念品・グッズ、LINEスタンプ、オープンキャンパス及びSNS



看護学部同窓会マスコットキャラクター

等で順次活用して参ります。また、令和7年11月から12月26日（金）まで、キャラクターの名前を公募します。

ご応募・ご投票くださった皆さまに心より御礼申し上げます。新しいマスコットとともに、“絆をつなぐ、未来へつなぐ”同窓会活動を一層盛り上げて参ります。

【高大連携】愛知医科大学病院体験学習開催

令和7年8月7日（木）午後1時20分から、愛知県立長久手高等学校との高大連携事業「医療看護探究C」の授業の一環として「愛知医科大学病院体験学習」が開催され、長久手高等学校医療看護探究コースの2年生10名及び3年生16名が参加しました。

当日は看護ユニフォームを着用し、3年生は中央棟の四つの病棟に分かれ、2年生は副院長の井上里恵看護部長から「愛知医科大学病院の役割と看護のしごと」についてのお話を聞いた後、中央棟の三つの病棟に分かれ、それぞれ実際の臨床現場を体験しました。

約1時間の病院体験を終えた後、看護学部棟講義室へ移動し、高校生たちが実際の医療現場を見学して感じたことを共有し、振り返りを行いました。

参加した高校生からは、「いろいろな患者さんと



井上看護部長による説明

の信頼関係を築くことのできる看護師になれるよう、今後は様々な年代や関係の方々とのコミュニケーションを大切にしていきたい」等の感想があり、病院体験学習を通じて、患者さんと看護師の距離感や接し方などを体感することができました。

【高大連携】認知症サポーター養成講座開催

令和7年9月17日（水）午後1時30分から、医心館多目的ホールにおいて、愛知県立長久手高等学校との高大連携事業「医療看護探究C」の授業の一環として、「認知症サポーター養成講座」が開催され、長久手高等学校医療看護探究コースの2年生10名の生徒が参加しました。

当日は、長久手市社会福祉協議会地域包括支援センターから講師の方をお招きし、認知症についてご講演いただきました。認知症の方への対応事例や、認知症当事者の方からのメッセージ動画視聴のほか、認知症に対するイメージや、認知症の方との接し方についてグループで考え、発表が行われました。

約1時間半の講座を終え、認知症サポーターの証であるオレンジカードを受け取った高校生からは、



講演の様子

「認知症の方への接し方を知る良い機会になりました」、「認知症で一番困っているのはご本人であると理解して接することが大切だと思いました」などの感想があり、認知症について理解を深めることができました。

愛知県重症外傷センターに指定

本院は令和7年8月1日付けで愛知県から「愛知県重症外傷センター」に指定されました。愛知県では令和5年1月から、救命救急センターの2病院を「愛知県重症外傷センター」の試行病院として、重症度・緊急度が高く生命に危険がある重症外傷患者の受け入れについて試行運用を行ってきました。本院はその試行病院の一つとして運用に参加して参りました。

このたび、試行運用の実績を踏まえ、関係機関との協議を経て、本院を含む4病院が「愛知県重症外

傷センター」に指定され、本格運用が開始されることとなりました。

「愛知県重症外傷センター」は、救命救急センターの更なる機能強化及び医療の質を向上させる取り組みとして、重症外傷患者の集約化により外傷治療レベルの向上を図るなど、救命率を高めていくことを目的としています。

本院では、今後も地域の中核医療機関としての責任を果たし、迅速かつ適切な医療の提供に努めて参ります。

病床管理部発足式の実施

令和7年10月1日（水）に病床管理部が発足し、翌2日（木）に大学本館第1会議室において、発足式が実施されました。

病床管理部は、病床稼働率100%の実現を目指し、全病床を一元的に管理し統括する部署であり、本院初の試みとなります。入退院支援と地域連携渉外を組み合わせ、より効率的で最良なベッドコントロールを推進していきます。部長には、循環器内科の鈴木頼快教授（特任）が就任し、看護師や事務職員など多職種体制で運営されます。

発足式では、祖父江元 理事長から「地域医療を支える重要な役割を担う」、天野哲也病院長から「チーム医療文化の発祥の部に」、井上里恵看護部長から「多職種で協力し最善の病床管理を」との期待が寄せられました。鈴木部長からは「『One team』の精神で地域に貢献したい」と決意が述べられました。



発足式の様子



決意を述べる鈴木部長

病院機能評価受審における訪問審査の実施

本院では、公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価（一般病院3，機能種別版評価項目3rdG:Ver.3.0）を受審し、令和7年9月24日（水）から26日（金）までの3日間にわたり訪問審査が行われました。同機構の定める認定基準を本院では平成17年から達成しており、今回は5回目の認定審査となります。

病院幹部を始めとした面接調査、五つの病棟に訪問し実施されるケアプロセス調査及び外来や検査部門の訪問等、調査内容は多岐にわたりますが、組織全体で準備してきた成果があり、滞りなく受審することができました。12月頃には機構から本審査における中間報告がある予定ですが、本院では中間報告を待たずして、見えてきた課題の改善に着手してい



訪問審査の様子

ます。

各部門において課題の改善を進め、今後、ますます患者さんの視点に立った病院運営を行い、患者さんを選ばれる病院を目指して参ります。

マネジメントラダー及びスペシャリストラダー認定証交付式挙行

令和7年9月3日（水）午前9時30分から、中央棟共同カンファレンスルームにおいて、マネジメントラダー及びスペシャリストラダー認定証交付式が挙行されました。

マネジメントラダーは平成28年度より導入され、今年度は新たに3名の認定、10名の更新が認証されました。看護部管理者は常に変化を恐れず、社会のニーズに対応した変革が求められます。院内のチーム医療に留まらず地域全体の看護の質の向上の要となるように、効果的な人材育成、自己の能力開発に役割発揮されることを期待しています。

また、スペシャリストラダーは令和元年より導入され、今年で7年目となります。今年度は新たに2名の認定、1名の更新が認証されました。今後、先見性と広い視野を持ち、専門性およびリーダーシップを発揮しながら組織横断的な活動だけでなく、地域へと発展的に活躍していくことを期待しています。



マネジメントラダー認定者との記念撮影



スペシャリストラダー認定者との記念撮影

看護管理者認定試験実施

本院では、令和7年8月27日（水）に、看護管理者認定試験が実施されました。看護部では、部長、副部長、師長及び主任の役職が設けられています。看護管理者としての入り口「看護主任」になるための要件として、令和3年度から看護管理者認定試験が実施されています。

本試験の受験には、看護師の能力段階を評価するクリニカルラダーⅢ、スペシャリストラダーⅡ及び助産師のCLOCMiPの認定を必須としています。記述問題、小論文、面接の後、看護部長面談が行われました。当日は皆さん緊張した面持ちで、真剣に試験と向き合いました。

認定期間は3年間の更新制で、現在53名の看護職員が基準を満たしています。本人の意向調査を経て、次世代の看護主任を選考する仕組みとなっています。

看護職員は特定行為研修を修了し、卓越した看護実践能力を誇るジェネラリスト（ASGN：Aichi



認定証

Medical University Hospital Super General Nurse)を目指す人、専門看護師、診療看護師及び認定看護師など専門性の高い看護師を目指す人など、様々なキャリア選択ができる時代となっています。どのようなキャリアを選択するにも管理的視点は重要です。認定された皆さんには、自信を持って看護に当たっていただくことを期待します。

愛Mate（日中看護補助者）車椅子移乗・搬送研修実施

看護部管理室では、看護師が本来の業務に専念できるよう看護業務の負担軽減を目指し、愛Mate（日中看護補助）の活用を推進しています。

令和7年9月1日（月）～4日（木）の4日間にわたり、愛Mateの業務拡大に向けて、車椅子移乗・移送の集合研修が実施されました。今回の業務拡大は、看護補助者ミーティングで愛Mateから出た「看護師さんの業務負担を軽減したい」、「患者さんの待ち時間を減らしたい」という意見を基に企画されました。

集合研修は全部で8回開催され、合計90名の愛Mateの受講がありました。研修では、車椅子への移乗・移送に関する基礎知識及び医療安全対策について講義を行い、その後、業務手順に沿って演習が行われました。愛Mateは積極的に参加し、研修後には「今、行っている車椅子移送について改めて学ぶことができて良かった」、「安全に車椅子移乗・移送するための技術を学べた」などの声が多く聞かれました。また、演習中には患者役に声を掛けながら、安心・安全に留意し車椅子移乗・搬送する姿に、愛Mateのコミュニケーション能力と意識の高さが感じられました。



研修風景

今までは、患者さんの車椅子移乗は全て看護職が行っていました。愛Mateが車椅子移乗を行うことで、看護師の業務負担軽減と、患者さんのリハビリ及び検査の待ち時間短縮が期待できます。今後も、看護チームの一員である愛Mateと看護師が協働し、患者サービスの質向上に努めて参ります。

学生アルバイト「愛Crew」集合研修実施 ～業務拡大第三弾 食事介助～

令和7年10月25日（土）に愛Crew集合研修が実施され、43名の参加がありました。

研修では、井上里恵看護部長から「看護職と看護補助者との協働」の講義と、看護部8B病棟の内村政信看護師長（看護業務負担軽減委員会委員）から「食事介助」の講義があり、看護チームにおける看護補助者の役割・業務及び食事介助についての基礎知識を学びました。

講義後には、看護部副部長と看護業務負担軽減委員会委員がファシリテーターとなり、食事介助演習が実施されました。演習では、愛Crewが2名1組となり、愛Crew役・患者役それぞれを体験しました。この演習を通して、講義での学びを深め、単に食事を介助するだけではなく、患者さんの自立を支援することを学びました。また、患者役を体験したことで食事介助のスピードや一口の量、声掛けのタイミングなどを学ぶことができました。

食事介助は、看護職への業務負担軽減に関するアンケート調査において、必要性の高い業務です。また、患者さんにとって、食事は病状や体力の回復・促進だけでなく、入院生活の中で楽しみな時間です。愛Crewが食事介助を行うことは、看護師の業務負担軽減だけではなく、患者サービスの向上に繋がることが期待されます。



食事介助演習



懇親会の様子

研修後には懇親会が行われ、井上看護部長を始め、看護部副部長、委員会委員、病院事務部診療支援課員及び愛Crewが、レストランオレンジの美味しい食事をいただきながらコミュニケーションを図り、大変充実した時間を過ごすことができました。今後も、愛Crewが看護チームの一員として活躍し、成長していくことを期待します。

高校生一日看護体験研修実施

令和7年8月6日（水）午前8時30分から、大学本館201講義室等において、愛知県看護協会の依頼を受け、高校生一日看護体験研修が実施されました。今年は近隣の高校から男女合わせて30名の参加がありました。

本研修は、高校生が実際の看護現場を体験・見学することで看護の心を理解してもらうとともに、この体験を契機として看護職を志望する者の増加を図ることを目的としています。病棟では看護師と行動

を共にしながら患者さんとふれあい、配膳を体験することができました。

実際に看護師が働く姿を見学した高校生からは、「命に関わる仕事ということで、強い責任感を持って仕事をしているのがすごく伝わってきた」、「大変だけれどやりがいがあることを実感した」などの感想ありました。本研修を通して、今後の社会を担う多くの高校生が、看護のみならず医療に関わる仕事を目指してくれることを期待します。

メディカルセンター 令和7年度第1回防災訓練実施

令和7年9月4日（木）、愛知医科大学メディカルセンターにおいて、令和7年度第1回防災訓練が実施されました。

今回の訓練では、「震度5弱の地震発生（建物倒壊なし）。その後、火災発生」を災害想定としました。昨年同様、訓練目標には①災害時の確認事項のポイントを理解したうえでのスムーズな本部の報告と対応の確認及び実践、②災害対策本部の統括機能の実践、③緊急時災害対策本部グループ連絡体制の活用の3点を掲げ、基本行動の反復訓練が行われました。また、防災に関して各部署で調整するきっかけとなるよう、現場の詳細な動きは決めず、「地震発生・本部設置・火災発生・通報・避難」のシナリオが設定されました。

訓練開始に当たり、災害対策委員長の勝野敬之教授（特任）から、「訓練を通して災害発災時の基本的な対応の再確認・見直しをしていただきたい」とあいさつがあり、災害対策本部長である羽生田正行病院長からの指示で訓練が開始されました。

各部署から選出された「消火班」、「避難誘導班」、「連絡通報班」の担当者によって、患者さん、職員及び施設等の状況が本部へ集約され、本部内での情報共有や指示出しの確認がされました。また、本訓練での新たな取り組みとして、一つの病棟を代表病棟に設定し、代表病棟内で医師、看護師及びリハビリテーション職員等の多職種が連携し、患者搬送を行うなどのより実践的な訓練が行われました。

訓練後、羽生田病院長から「災害時のツールにLINEを使うなど、連絡手段は簡単になったものの、運用に課題を見つけることができた。そういった課



災害対策本部への状況報告



病棟訓練の様子



エアストレッチャーを使用した搬送訓練

題を今後解決していく必要がある」との総評がありました。

令和7年度第2回防災訓練は夜間帯の発災を想定し、病棟に特化した訓練を実施予定です。今後も現場の意見に耳を傾け、今回の訓練での課題点を検証し、一層実効性のある訓練の実施に努めて参ります。

メディカルセンター 岡崎北高校「北高祭」にブース出展

令和7年9月10日（水）愛知県立岡崎北高等学校の学校祭「北高祭」において、PTA活動への協力として、メディカルセンターのブースが出展されました。

ブースでは「バイタル測定体験」及び「車椅子体験」が実施され、86名の生徒の参加がありました。バイタル測定体験では、血圧や脈拍を測定することで健康への関心を深めることができました。車椅子体験では、車椅子に乗る側、操作する側の体験を通じて、日常生活における車椅子の使い方や介助の大切さ、医療職への興味を感じてもらう機会となりました。

参加者からは、「手動の血圧計に初めて触れた。新しい体験ができて良かった」、「車椅子体験を通じて、身体が不自由になったときの大変さを知ることができた」等の感想があり、ブースは大いに盛り上がりました。

今回の取り組みが、地域におけるメディカルセンターの知名度向上に加え、次代を担う若い世代への健康意識の啓発にも繋がることを期待します。



バイタル測定体験ブース



車椅子体験ブース

メディカルセンター 岡崎3病院集合！糖尿病予防イベント開催 ～スポーツの日、一緒にカラダを動かそう～

令和7年10月13日（月・祝）に岡崎市図書館交流プラザ「りぶら」において、岡崎市民病院・藤田医科大学岡崎医療センター・愛知医科大学メディカルセンターの3病院合同による糖尿病予防イベントが開催されました。

3回目の開催となる今回はメディカルセンターの幹事年に当たり、加藤義郎副院長を始め「メディカルセンター糖尿病療養支援チーム」のメンバー14名が参加しました。

会場では、血糖測定やフットケアなど七つのブースが設けられ、120名を超える来場者が楽しみながら自分の健康状態を確認できる内容となりました。また、岡崎城を巡るウォークラリーでは、適度な運動の大切さを体感していただく機会にもなりました。更に、糖尿病専門医による講演では、「運動で変わる糖尿病との上手な付き合い方」をテーマに日常生活で気を付けたい習慣などが分かりやすく紹介され、多くの参加者が熱心に耳を傾けていました。

今後も地域医療機関と連携しながら、地域の皆さ



会場の様子



ウォークラリーの様子

まに健康意識を高めていただく予防啓発活動を継続して参ります。

眼科クリニックMiRAI 市民公開講座 「健康に#プラス！健康セミナー『MiRAIの目を考える』」開催

令和7年8月3日（日）午前10時30分から、CBC本社1スタジオにおいて、市民公開講座「健康に#プラス！健康セミナー『MiRAIの目を考える』」のラジオ公開収録イベントが開催されました。猛暑にも関わらず、定員80名を超える多くの方にご来場いただきました。

当日は、眼科学講座の瓶井資弘教授、近視進行抑制寄附講座の三木篤也教授（特任）、柴田藍助教が登場し、幅広いテーマで講演が行われました。瓶井教授は「網膜」の構造と疾患、早期発見の重要性について解説され、柴田助教は現代社会で増加する「近視」のリスクと予防法を紹介されました。また、眼科クリニックMiRAIのクリニック長でもある三木教授（特任）は「緑内障」をテーマに、正しい理解と検査の最前線について講演されました。

本講座の様子は、8月23日（土）午後2時10分からCBCラジオ特別番組として放送され、参加できなかった方々にも広く届けられました。公開講座とラジオ放送を通じて、地域の皆さまと共に目の健康



出演者による記念撮影



公開収録の様子

を考える貴重な機会となりました。

愛知医大サービス株式会社 オープンキャンパスに出店

令和7年8月2日（土）に愛知医大サービス株式会社が本学のオープンキャンパスに出店し、オリジナルグッズを販売しました。じりじりと焼け付くような暑い日でしたが、多くの方にご来場いただき、様々なグッズをご覧いただきました。

例年、受験生には大学名が入った文房具類が好評で、今年もジェットストリームの3色ボールペン、クルトガのシャープペン、ドクターヘリのイラスト入りの付箋が特に人気でした。また、クリアファイルやペンなどのお得なセット商品もご好評をいただきました。他にもタオルやトートバッグなどを取り揃えており、手に取ってご家族やご友人と相談しながら楽しそうに商品を選んでいただきました。

中には「このペンで受験勉強を頑張ります」と笑



オリジナルグッズ

顔で話す学生さんもみえ、終始和やかな空気が流れていました。愛知医大サービス株式会社は、陰ながら皆様のご健闘をお祈りしております。

救急診療部 加納秀記教授 令和7年防災功労者内閣総理大臣表彰

救急診療部の加納秀記教授【写真】が、令和7年9月17日（水）午後2時から総理大臣官邸で開催された防災功労者内閣総理大臣表彰式において、令和7年防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞しました。

この賞は、災害時における防災活動や防災思想の普及または防災体制の整備について、顕著な成績を挙げまたは功績があったものとして、全国民の模範となり、かつ「防災の日」において内閣総理大臣が顕彰するに足ると認められ授与されるものです。

受賞した加納教授からは、「このたび、防災功労者内閣総理大臣表彰をいただきました。平成24年に設置された愛知県災害医療コーディネーターに就任し、愛知県における災害医療体制の確立に向けた取り組みや、中部国際空港における航空機事故など



災害医療体制の確立への取り組みが評価されました。DMAT隊員として震災・台風被災地での活動、新型コロナウイルス対策など災害医療活動だけでなく、隊員養成や災害教育、災害訓練など体制整備の重要性を再確認しました」との感想がありました。

精神科学講座 宮田淳教授 日本生物学的精神医学会 若手研究者育成プログラム最優秀奨励賞表彰受賞

精神科学講座の宮田淳教授【写真】が、令和5年7月24日（月）に福岡コンベンションセンターで開催された日本生物学的精神医学会において、若手研究者育成プログラム最優秀奨励賞を受賞しました。

この賞は、宮田教授の一連のご研究、「結合性と妄想の3要因モデルに基づく統合失調症研究」が評価されたものです。

受賞した宮田教授からは、「受賞時に51歳と若手と言って良いか微妙な年齢でしたが、最優秀賞の前提である若手研究者育成プログラムへの応募時はしっかりと規定を満たしておりました。PIになるのが早かったため、自分の教え子をこの賞に推薦していた時に、ふと『僕自身、まだこの賞に応募資格が



あるんですよ』と選考委員の先生に冗談を言ったつもりが『絶対に出せ、そして若手育成に協力してほしい』と半ば脅迫され応募を決意し、本当に良かったと思っています。今後は自分が若手育成のために尽力する所存です」との感想がありました。

内科学講座（血液内科） 水野昌平准教授 論文がHaematologica誌に掲載

内科学講座（血液内科）の水野昌平准教授の論文「新たに多発性骨髄腫と診断された患者における自家造血細胞移植後の生存率および過剰死亡率に対する年齢の影響」が、血液内科領域で著明な学術誌「Haematologica」へ掲載されました。本論文は、多発性骨髄腫の自家造血幹細胞移植成績について、世界各地域のレジストリーグループと共同研究したものです。

水野准教授からは、「この度、世界各地域から集積された6万例以上のレジストリーデータを用い、

多発性骨髄腫に対する自家造血幹細胞移植における超過死亡が、年齢によらず同程度であることを明らかにすることができました。本研究成果が、血液内科領域の権威ある学術誌に掲載されたことを大変光榮に存じます。本研究の遂行に当たり、内科学講座（血液内科）の高見昭良教授、花村一朗教授（特任）を始め、多くの先生方よりご指導・ご支援を賜りましたことに、心より深く感謝申し上げます。今後も臨床及び研究活動を通じて本学の発展に貢献できるよう、一層精進して参ります」との感想がありました。

血管外科 三岡裕貴講師 第44回日本静脈学会総会第12回Integral Travel Award受賞

血管外科の三岡裕貴講師【写真】が、令和6年6月13日（木）・14日（金）に軽井沢プリンスホテルウエストで開催された第44回日本静脈学会総会のInternational Sessionにおいて、第12回Integral Travel Awardを受賞しました。

この賞は、三岡講師の演題「A study of optimal pressure for compression therapy of Klippel-Trenaunay syndrome」が、優れた研究成果として評価されたものです。受賞した演題の中から三岡講師に対して、ヨーロッパ各地で開催されるEuropean Venous Forum年次総会でその研究成果を発表する機会が与えられ、令和7年6月26日（木）～28日（土）にポーランドのクラウフで開催された第25回European Venous Forumにおいて発表が行われました。

受賞した三岡講師からは、「この度は大変名誉ある賞をいただき身の引き締まる思いです。改めまして、演題発表にご助力いただいた全ての先生方に厚く御礼申し上げます。引き続き微力ながら静脈学の



左から、三岡講師、日本静脈学会国際委員会の八巻隆委員長



第25回European Venous Forumでの発表風景

発展に貢献できますよう精進して参ります。」との感想がありました。

精神科学講座 藤田貢平助教 第120回日本精神神経学会学術総会優秀発表賞受賞

精神科学講座の藤田貢平助教が、令和6年6月20日(木)～22日(土)に札幌コンベンションセンターで開催された第120回日本精神神経学会学術総会において、優秀発表賞を受賞しました。

この賞は、藤田助教の演題「ラウドネス依存性聴覚誘発電位と心理指標との関連性」が優れた演題として評価されたものです。

受賞した藤田助教からは、「学生時代、痛みセンターの研修中にご紹介いただき、学位論文でも使用したパラダイムでこのような賞をいただけたことは、喜びよりもこれまでご指導していただいた先生方への感謝が圧倒的に勝ります。ここを起点に更に研究を広げられるように努力して行こうと思います」との感想がありました。

卒後臨床研修センター臨床研修医 本多朋華先生 及び 近藤竜徳先生 第99回日本糖尿病学会中部地方会若手優秀演題賞受賞

卒後臨床研修センター臨床研修医の本多朋華先生及び近藤竜徳先生が、令和7年9月6日(土)に名古屋コンベンションホールで開催された第99回日本糖尿病学会中部地方会において、若手優秀演題賞を受賞しました。

この賞は、本多先生の演題「インフルエンザ罹患後に黄色ブドウ球菌性肺炎を合併しDKAを発症した緩徐進行1型糖尿病の1例」及び近藤先生の演題「環状肉芽腫に対するジアフェニルスルホン投与によりHbA1cが偽性低値を呈した2型糖尿病の1例」が、糖尿病学の発展に大きく寄与するものとして評価されたものです。

受賞した本多先生からは、「この度は名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。これも皆さま方のご協力及びご指導のおかげと感謝しております。今後もなお一層精進していく所存でございます」との感想がありました。近藤先生からは、「この度は



左から、近藤先生、内科学講座(糖尿病内科)の神谷英紀教授、本多先生

栄えある賞をいただき、大変光栄に存じます。これも皆さま方のご協力及びご指導のおかげと感謝しております。今回の発表で得た経験を今後に活かし、更に成長できるよう努力して参ります」との感想がありました。

加齢医科学研究所神経iPS細胞研究部門 鄭羽伸助手 第24回日本再生医療学会総会優秀演題賞受賞

加齢医科学研究所神経iPS細胞研究部門の鄭羽伸助手【写真】が、令和7年3月20日(木・祝)～22日(土)にパシフィコ横浜ノースで開催された第24回日本再生医療学会総会において、優秀演題賞を受賞しました。

この賞は、鄭助手のポスター発表「ヒトiPS細胞由来神経・筋共培養モデルを用いた運動ニューロン疾患の病態解明」が、優れた演題として評価されたものです。

受賞した鄭助手からは、「この度、第24回日本再生医療学会総会において優秀演題賞をいただき、大変光栄に存じます。ご指導いただいた先生方、共同研究者の皆さまに心より感謝申し上げます。今後も研究を更に発展させ、再生医療の進展に貢献できるよう努めて参ります」との感想がありました。



中央放射線部 藤田裕子主任 日本ハイパーサーミア学会第42回大会優秀発表賞受賞

中央放射線部の藤田裕子主任【写真】が、令和7年9月20日（土）・21日（日）に名古屋市立大学川澄キャンパスで開催された日本ハイパーサーミア学会第42回大会において、優秀発表賞を受賞しました。

この賞は、藤田主任の演題「問診票を用いたハイパーサーミア患者の主観的情報と治療状況の関係調査」が高く評価されたものです。

受賞した藤田主任からは、「この度は『優秀発表賞』をいただき、大変光栄に存じます。これも一重に多くの先生方のご指導のおかげと深く感謝しております。患者さんが安心して治療を続けられるよう、今後もチームで支援していきたいと考えております。



今回の受賞は、日々の臨床活動と研究姿勢が高く評価された成果です。今後もより良い治療を目指して取り組んで参ります」との感想がありました。

看護部 高柳佳弘主任 ミャンマー国際緊急援助隊派遣 外務大臣感謝状授与

看護部14A病棟の高柳佳弘主任【写真】が、令和7年9月12日（金）に東京都の外務省講堂で開催された国際緊急援助隊の参加者に対する外務大臣感謝状授与式において、感謝状を授与されました。

授与式では、令和7年3月28日（金）にミャンマー連邦共和国で発生した地震を受けて派遣された国際緊急援助隊員に対して、両国の友好親善関係の発展に多大な貢献を果たしたとして、岩屋毅外務大臣から感謝の意が表されました。

高柳主任からは、「3月のミャンマー地震に際し、JICA国際緊急援助隊医療チーム（二次隊）の一員として派遣され、被災地で外来診療・トリアージ、医薬品・資機材管理、搬送調整に従事しました。資機材に限られる中でも、安全と質の両立を図りつつチーム医療・看護を実践しました。活動を通じ、初動期の多職種協働と情報共有の重要性を再確認しました。また、岩屋外務大臣から感謝状を拝受し、ミャンマーで被災された方々に改めて思いを寄せました。



看護部での記念撮影
高柳主任（前列左）

今回の経験は、看護師の観察・アセスメント力、感染予防と安全確保、患者・家族教育、文化背景を踏まえたコミュニケーション、心理的支援、継続看護の連携を具体化する契機となりました。得た知見は院内の訓練・教育に還元し、災害医療体制の一層の強化に努めます。最後に、今回の派遣に際し、学内外の関係各位から賜りましたご支援に厚く御礼申し上げます」との感想がありました。

看護部 本田美海看護師 第21回クリティカルケア看護学会学術集会優秀演題賞受賞

看護部11B病棟の本田美海看護師【写真】が、令和7年7月5日（土）に東京ビッグサイトで開催された第21回日本クリティカルケア看護学会学術集会において、優秀演題賞を受賞しました。

この賞は、本田看護師の演題「特定行為研修修了者によるPICC（末梢挿入型中心静脈カテーテル）回診の活動報告」が高く評価されたものです。

受賞した本田看護師からは、「看護師によるPICC挿入は、挿入前・挿入中・挿入後の看護に一連の流れで関わるができるメリットがあります。挿入前にPICCの必要性を検討し、回診時には異常の早期発見やPICCの抜去・入れ替えの提案をすることで、より良いカテーテル管理に繋がっています。また、最近ではTPN（中心静脈栄養）や化学療法だけでなく、高齢者・小児を始め、末梢静脈ライン確保や採血が強い苦痛となっている患者さんにPICC



を挿入することも増え、PICCの汎用性が高くなっています。定期的な入れ替えが必要ではない点では、施設や在宅でも管理しやすいというメリットもあり、PICCを必要としている患者はもっと多いのではないかと考えます。今後もPICCの汎用性を高めていくとともに、適切なカテーテル管理に努め、患者にとってより良い療養生活に繋がるような活動を続けて参ります」との感想がありました。

看護部 島美樹看護師 第22回日本乳癌学会中部地方会優秀演題賞受賞

看護部30外来の島美樹看護師【写真】が、令和7年9月21日（日）に名古屋コンベンションホールで開催された第22回日本乳癌学会中部地方会において、優秀演題賞を受賞しました。

この賞は、島看護師の演題発表「乳がんによる上肢リンパ浮腫患者における用手的リンパドレナージ前後の皮膚硬度の部位別比較：Myoton PROを用いた評価」が、看護学の発展に大きく寄与するものとして評価されたものです。

受賞した島看護師からは、「この度は名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。看護職として、リンパ浮腫セラピストとして長年従事して参りました。これも多くの先生方、一緒に働いた皆さまのご



協力及びご指導の賜り物と深く感謝しております。これからもご指導、ご鞭撻を賜りながら、リンパ浮腫セラピストとして活躍していきたいと思っております」との感想がありました。

学 術 振 興

令和7年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構 委託研究開発契約の締結

令和7年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構委託研究課題が採択され、次のとおり研究契約を締結しました。

(金額単位：円)

研究事業名	研究開発担当者	委託研究開発費	研究開発課題名
脳神経科学統合プログラム	祖父江元 学長	104,000,000	孤発性筋萎縮性側索硬化症の病態介入治療標的の同定と創薬シーズ開発：大規模臨床ゲノム情報と患者由来iPS細胞／運動ニューロンの統合解析を介して

- ・ 令和7年8月1日から10月31日までの日本医療研究開発機構委託研究の代表課題を記載。
- ・ 委託研究開発費は、他機関への再委託費及び間接経費を含む。

令和7年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 交付決定

令和7年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）が採択され、次のとおり交付決定がありました。

（金額単位：千円）

研究種目	研究代表者	直接経費	間接経費	研 究 課 題
研究活動スタート支援	松川哲也 医学部 産婦人科学講座, 助教	1,000	300	p53変異子宮体癌における免疫微小環境改変と抗CD47治療の可能性
〃	中村幸男 大学病院 骨粗鬆症・ロコモ・関節疾患センター, 教授 (特任)	800	240	先天性橈尺骨癒合症の候補遺伝子および胎生致死候補遺伝子ZMAT2の機能解析
〃	山雄さやか 大学病院 眼科, 講師	1,000	300	偏光OCTによる網脈絡膜線維性病変の可視化と新たな評価法の確立
〃	和田伊織 大学病院 眼科, 助教	600	180	視機能保全に向けたRPE機能マーカーの創出：偏光OCTによる新規診断指標の開発
〃	上松東宏 医学部 総合診療医学講座, 准教授 (特任)	1,100	330	診療所の外来で発生するインシデントによる影響の分析とその分類法の開発

- ・令和7年10月31日時点の情報を掲載。
- ・「交付決定通知」を基に作成。研究種目及び課題番号順にて記載。今年度請求額を記載。
- ・氏名は、e-Rad（府省共通研究開発管理システム）研究者登録名にて記載。

研究助成等採択者

◇公益財団法人愛知腎臓財団 令和7年度研究助成

・氏 名 雫真人（外科学講座(腎移植外科)・助教）
研究題目 腎移植におけるヒト血液中単球に着目した免疫グロブリン療法の個別化医療の確立
助成金額 100,000円

・氏 名 萩田淳一郎（内科学講座(腎臓・リウマチ膠原病内科)・助教(医員助教)）
研究題目 糖尿病関連腎臓病（DKD）の進展における分枝鎖アミノ酸（BCAA）代謝の役割の解明
助成金額 250,000円

・氏 名 三輪祐子（腎疾患・移植免疫学寄附講座・助教）
研究題目 BKポリオーマウイルス（BKPyV）免疫モニタリングに資するLigandome解析によるT細胞エピトープの同定
助成金額 200,000円

◇HOYA株式会社 医学・薬学に関する研究助成

・氏 名 瓶井資弘（眼科学講座・教授）
研究題目 網膜静脈分枝閉塞症眼における経時的な視力低下の原因究明
助成金額 660,000円

◇公益財団法人日東学術振興財団
第42回研究助成

・氏 名 玉置優貴（解剖学講座・助教）
研究題目 急性肝障害マウスへの肝細胞移植後の経時的な治療効果と機序の解明
助成金額 2,000,000円

・氏 名 丸山健太（薬理学講座・教授）
研究題目 感覚腎臓病態学の創成と応用
助成金額 2,000,000円

令和8年度科学研究費助成事業申請状況

研究種目	申請件数（件）	申請金額（千円）
学術変革領域研究（A）（公募研究）	2	14,500
基盤研究（B）（一般）	9	59,552
基盤研究（C）（一般）	122	218,451
挑戦的研究（開拓）	1	7,000
挑戦的研究（萌芽）	5	11,324
若手研究	40	68,371
合 計	179	379,198

※令和7年10月31日時点での数字を掲載。

※申請金額は令和8年度の申請額。

学 位 授 与

◆大学院医学研究科



黒須 春香

学位授与番号 甲710号

学位授与年月日 令和7年9月30日

論文題目：「AEBP1-GLI1 pathway attenuates the FACT complex

dependency of bladder cancer cell survival(AEBP1-GLI1経路は膀胱がん細胞の生存におけるFACT複合体への依存性を軽減する)」



田口 英俊

学位授与番号 甲711号

学位授与年月日 令和7年9月30日

論文題目：「Evaluation of virtual monochromatic imaging using

portal-venous phase dual-energy CT for detection of pulmonary embolism（門脈相デュアルエネルギーCTを用いた仮想単色画像による肺動脈塞栓検出の評価）」



石川 史

学位授与番号 甲712号

学位授与年月日 令和7年10月23日

論文題目：「A Two-week, Hands-on Educational Program for Primary

Care Pediatricians Aimed at Equalization of Pediatric Allergy Practice across Institutions and Regions.（地域間、施設間の小児アレルギー診療の均霑化を目的とした、小児科プライマリケア医対象の2週間の実地研修）」



若山 怜

学位授与番号 乙442号

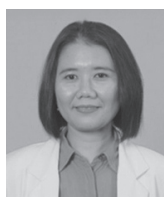
学位授与年月日 令和7年10月9日

論文題目：「Impact of Transtheoretical Model Staging on

Health Outcomes in Japanese Men Aged 40-70 : A Propensity Score Matching Analysis.（40～70歳日本人男性における行動変容ステージと健康アウトカムの関連：傾向スコアマッチングを用いた分析）」

外国人研究員のご紹介

本学において研修するため、外国人研究員としての来学された方をご紹介します。(敬称略)



デスタ アルディーニ
Desta Nur Ewika Ardini

国 籍：インドネシア

現 職：カリアディ病院 医師

受入講座：内科学講座（血液内科）

受入期間：R7.9.1～R7.9.30（1か月）

研究課題：造血幹細胞移植及び細胞治療の臨床技術
習得



イカ カルティヤニ
Ika Kartiyani

国 籍：インドネシア

現 職：カリアディ病院 血液内
科・腫瘍内科研修医

受入講座：内科学講座（血液内科）

受入期間：R7.9.1～R7.9.30（1か月）

研究課題：造血幹細胞および臍帯血処理技術の習得



マブルラツッサニア マヘルディッカ
Mabratussania Maherdika

国 籍：インドネシア

現 職：カリアディ病院 医師

受入講座：内科学講座（血液内科）

受入期間：R7.9.1～R7.9.30（1か月）

研究課題：造血幹細胞および臍帯血処理技術の習得



シャフィクル イスラム
Shafiqul Islam

国 籍：バングラディシュ

現 職：チッタゴン大学生物学部
生化学・分子生物学科
研究員

受入講座：生化学講座

受入期間：R7.10.1～R8.3.31（6か月）

研究課題：CRISPR／Cas9システムの改良研究

本学講座等の主催による学会等

【学会名】

- ・第13回日本結節性硬化症学会学術総会
- ・第34回愛知眼科フォーラム
- ・第3回長久手リハビリテーション地域連携フォーラム
- ・第32回一般社団法人日本脊椎・脊髄神経手術手技学会学術集会
- ・第61回日本胆道学会総会
- ・第61回日本移植学会総会

【開催日】

令和7年9月7日(日)
 令和7年9月7日(日)
 令和7年9月19日(金)
 令和7年9月19日(金)・20日(土)
 令和7年10月2日(木)・3日(金)
 令和7年10月9日(木)～11日(土)

【会長等】

奥村 彰久
 瓶井 資弘
 尾川 貴洋
 原 政人
 佐野 力
 小林 孝彰

第13回日本結節性硬化症学会学術総会

小児科学講座・教授 奥村 彰久

令和7年9月7日(日)、名古屋大学医学部附属病院にて第13回日本結節性硬化症学会学術総会を開催致しました。日本結節性硬化症学会は、稀少疾患である結節性硬化症に関する研究者が集う学会ですが、その疾患の特性から、小児科、泌尿器科、脳神経外科を始め多岐にわたる診療科の先生方が参加されました。また、本会の特徴として、患者さんやご家族との連携が挙げられ、学術総会にも毎回ご参加いただいております。今回は遠方の方々にも参加いただけるよう、ハイブリッド形式での開催と致しました。

テーマは「明日を拓く」とし、現地参加者は約

100名、オンライン参加者は約30名にのぼり、盛会のうちに終了致しました。患者さんやご家族の方も同じフロアで参加され、和やかで温かい雰囲気にも包まれていました。最新の知見を含む興味深い講演や発表が数多く行われ、活発なディスカッションも展開され、参加された皆さまにとって大きな刺激になったことと存じます。

本会の開催に当たり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会よりご支援を賜りました。大きなトラブルもなく、無事に学術総会を終えることができましたことを、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

第34回愛知眼科フォーラム

眼科学講座・教授 瓶井 資弘

愛知眼科フォーラムは、年に一度、本学眼科学講座が主催し、一般眼科医、視能訓練士に公開している眼科全般の学会です。本年度は令和7年9月7日(日)に名古屋市中区栄の興和株式会社本社ビルにおいて第34回大会を開催致しました。【写真】

特別講演では慶應義塾大学眼科学教室の栗原俊英准教授をお招きし、「光生物学を基盤とした疾患病態生理の理解と治療開発2025」と題してご講演いただき、Young Investigator講演では島根大学医学部眼科学講座の杉原一暢講師をお招きし、「緑内障の



手術タイミングと合併症」と題してご講演いただきました。

また、本学眼科学講座と関連病院から22題の一般演題の発表があり、いずれも高度な眼科医療、高い水準の研究を示すもので、活発な質疑応答が行われ、盛会のうちに終了することができました。

最後に、本学会を開催するに際しまして、一般財団法人愛知医科大学愛恵会からご支援いただきましたこと、この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

第3回長久手リハビリテーション地域連携フォーラム

リハビリテーション医学講座・教授 尾川 貴洋

令和7年9月19日（金）に第3回長久手リハビリテーション地域連携フォーラムを開催致しました。

【写真】

本フォーラムは、リハビリテーション医療において病院間・施設間の情報共有や治療連携が十分とは言えない現状を踏まえ、地域全体で「切れ目のないリハビリテーション医療体制」の構築を目的として、令和5年から開催しているものです。急性期から回復期、生活期、在宅医療に至るまで、患者中心の医療をどのように実現していくかを、地域の医療機関・施設が一堂に会して議論する貴重な機会となっています。

今回のフォーラムでは、これまで以上に実践的で双方向性のあるプログラムを企画しました。まず、心臓弁膜症術後に多様な合併症を呈した症例を取り上げ、急性期から生活期までの長期リハビリテーション治療経過を多角的に検討しました。特筆すべきは、実際の患者さんご家族をお招きし、入院中の思いや回復過程で感じたことを伺うトークセッション形式を導入した点です。医療従事者だけでは見落としがちな「患者・家族の声」を共有することで、医療の原点である「患者中心のリハビリテーション」の意義を再認識する場となりました。

続いて、「ICUから一般病棟まで、複合疾患をもち治療に難渋した症例」をテーマにケースカンファレンスを実施し、それぞれの立場から意見を交わしました。重症例の回復過程における課題を共有することで、より実践的なチーム医療の在り方を深く掘り下げることができました。



特別講演では、岐阜市民病院リハビリテーション科の佐々木裕介先生をお迎えし、「立たせる、その一歩が人生を変える～早期離床と運動療法の挑戦～」と題してご講演を賜りました。急性期から積極的な離床・運動療法を展開する意義、そして、チーム全体で患者の可能性を引き出す重要性について、臨床経験に基づく深い示唆をいただきました。

リハビリテーション医療は、スタッフ一人ひとりの考えや行動が患者の回復に直結する医療です。そこに多職種が連携して関わることで、治療効果は飛躍的に高まります。本フォーラムは、正にその「連携の力」を再認識し、地域全体で患者を支える意識を共有する場として、非常に意義深いものとなりました。

今後も、長久手地域を中心としたネットワークをより一層強化し、急性期から在宅まで切れ目のないリハビリテーション医療を実現して参りたいと思います。最後に、本フォーラムの開催に当たり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会を始め、多大なるご支援とご協力を賜りました関係各位に、心より感謝申し上げます。

第32回一般社団法人日本脊椎・脊髄神経手術手技学会学術集会

脊椎脊髄センター・教授 原 政人

第32回一般社団法人日本脊椎・脊髄神経手術手技学会学術集会を令和7年9月19日（金）・20日（土）に名古屋市のウインクあいちにおいて開催致しました。【写真】

本学会の理念は、①個人主体の参加、②整形外科と脳神経外科の集学、③世界と同時進行であり、脳神経外科医と整形外科医が一堂に会して議論を戦わせる先鋭的な学会であります。学会の主題は、「多様性への理解と進化」(Diversity and Evolution)とし、副題として、「－手術技術の継承と変革、すべての神経を思料して－(Inheriting and transforming surgical techniques－considering whole nervous system)」と致しました。

私たち脳神経外科医と整形外科医では初期教育が異なっており、運動器を扱う整形外科、神経、特に脳を扱う脳神経外科学との認識が世間一般にも浸透していると思います。しかし、脊椎は運動器であり、加齢とともに変性し、神経圧迫をきたして神経症状を呈することが多いものであり、運動器と神経両方の理解がなければ病態を理解できません。神経は脳から脊髄、神経根、神経叢及び末梢神経と繋がっており、異なる部位に病変があっても、よく似た症状を呈することがあります。しかも、超高齢化の日本においては、加齢による変性で同時に異なる場所が圧迫されていることは珍しくありません。

私たちは、確実かつ正確な手術を目指しており、その一つが診断技術の向上です。病変部位を的確に治療できなければ、臨床成績の向上は得られません。また、二つ目としては、確実な手術です。手術技術に関しては、各々の外科医の研鑽は必要ですが、手術器具の選択も重要になります。脊椎・脊髄手術は、顕微鏡、内視鏡及び外視鏡などを使って行われます



が、これらは術者の好みで選択されています。しかし、少しずつ開発は進んではきているものの、まだまだ成熟していない機器もみられているのが現状です。

本学会では、神経減圧に向けての多種多様なアプローチについて、固定をした方が良いのか否か（減圧のみで可能か）などについてディベートを行ってもらいました。また、新しい知見についても脳神経外科医、整形外科医の間で議論をしていただきました。ディベート3セッション、シンポジウム6セッション、主題11セッション、一般演題、ポスター演題を組み、議論が白熱しました。また、これからますます発展する脊椎脊髄外科医から、新しい手術技術や知見などを発表していただく機会として、スパインリーダーズレクチャーを8名の先生にお願いしました。

参加者は470名であり、非常に熱い議論を交わすことができ、有意義な会になりました。一般財団法人愛知医科大学愛恵会を始め、本会の開催に当たり皆さま方の多大なるご支援、ご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

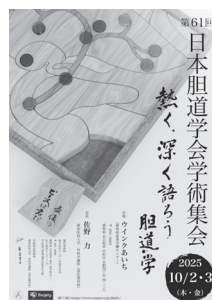
第61回日本胆道学会総会

外科学講座（消化器外科）・教授 佐野 力

令和7年10月2日（木）・3日（金）の2日間にわたり、ウインクあいちにおいて、第61回日本胆道学会総会を開催致しました。【写真】

日本胆道学会の歴史は、昭和40年に設立された「胆のう造影研究会」に始まり、その後、胆道疾患全般にわたる問題を討議する場として発展を遂げてきました。第5回研究会からは「胆道疾患研究会」、第18回研究会からは「日本胆道疾患研究会」と名称が変更され、昭和62年に「日本胆道学会」として正式に設立されました。

今回のテーマは「熱く、深く語ろう胆道学」としました。肝胆膵領域においては、膵臓がん続き、肝臓がん、そして胆道がんにおいても、切除適応や限界を示すボーダーラインの議論が活発になっています。また、切除不能な肝門部領域胆管がんに対する生体肝移植が先進医療の臨床試験として開始されるなど、新たな治療法が登場しています。更に、胆道癌手術においてもロボット支援下の低侵襲手術が広がり、患者の負担軽減や術後の回復促進に寄与しています。



本会におきましては1,500名を超える方々に参加登録をいただき、現地には1,100名を超える方々にご来場いただきました。特別企画やインターナショナルセッションも含めて、まさに「熱く、深く語る」ことができたと自負しております。令和7年10月4日（土）には、付随の市民公開講座「胆石症を学ぼう！」も開催し、多くの市民の方に参加いただきました。

本学会の開催に当たり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会からご支援をいただきましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第61回日本移植学会総会

外科学講座（腎移植外科）・教授 小林 孝彰

令和7年10月9日（木）～11日（土）に第61回日本移植学会総会をウインクあいちで開催致しました。（<https://www.congre.co.jp/61jst2025/>）【写真】

移植（特に臓器移植）の関係者が集い、発表、討論など情報交換を行う全国学術集会です。学会のタイトルは「新たな挑戦：超えよう！飛び出そう！弾けよう！」ですが、人材育成も重要な課題であり、特別講演には、将棋の杉本昌隆八段による「AI時代に育つ才能たち－藤井聡太七冠に映る、変わりゆく育成と“師匠”の役割」、更に、ビリギャルの母、橘こころさんの講演「子どもの善意を信じると子どもは伸びる！子育てが楽で楽しくなる！」がございました。招待講演として、アメリカ・マサチューセッツ総合病院の河合達郎先生には遺伝子組換えブタを用いた異種腎移植の最新情報を、前TTS会長のElmi Muller先生（南アフリカ・ステレンボッシュ大学）にはHIV陽性ドナーの臓器移植についてご講演いただきました。その他にも海外から多くの方にご参加いただき、Costimulation Blockade, Xenotransplantationの臨床応用などのシンポジウムにご登壇いただきました。

市民公開講座では、医師でありミステリー作家でも有名な知念実希人先生の講演があり、Z世代の若



者（本学の学生も参加）と一緒に臓器提供について話し合いの場が設けられました。

一般演題口演192題、ポスター170題、シンポジウム34枠、委員会／共催セッション10枠、特別講演／招待講演4枠、理事長講演、会長講演から構成されました本総会には、予想を遥かに上回る1,900名を超える方にお集まりいただき、盛況かつ有意義な学術集会となりました。

本総会の準備、運営にご協力いただきました教職員、各種委員会、当日スタッフの方々、そして多大なるご支援をいただきました、一般財団法人愛知医科大学愛恵会を始めとする関係者の皆さまに心より御礼を申し上げます。

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

就業規則の一部改正等

法改正に伴い、育児期の柔軟な働き方を実現するための措置を整備するため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和7年10月1日

【新規制定】

- ・学校法人愛知医科大学ベビーシッターサービス利用補助に関する規程
- ・学校法人愛知医科大学養育兩立支援休暇に関する規程

【一部改正】

- ・学校法人愛知医科大学就業規則
- ・学校法人愛知医科大学育児休業等に関する規程
- ・学校法人愛知医科大学事業所内保育所に関する規程

介護休業等に関する規程の一部改正

学校法人愛知医科大学介護休業等に関する規程の一部が改正され、介護短時間勤務の手続き及び各種様式が改められました。

施行日は令和7年4月1日

事務組織再編に伴う関係規則の整備

大学・病院の全体的な事務部門の統合と集約により、業務の効率化と人的資源の最適配置を図るために行う事務組織再編に伴い、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和7年10月1日

【一部改正】

- ・学校法人愛知医科大学資金運用規程
- ・学校法人愛知医科大学固定資産管理規程
- ・愛知医科大学病院がんセンター規程

学則の一部改正

愛知医科大学学則の一部が改正され、令和8年度における医学部愛知県地域特別枠の入学定員について、令和7年度に引き続き10名とすることになりま

した。

施行日は令和8年4月1日

病原体等安全管理規程の一部改正

愛知医科大学病原体等安全管理規程の一部が改正され、本学で保管する病原体等の区分が明確化されました。

施行日は令和7年9月1日

学生の表彰に係る規程の一部改正

学生の表彰に係る規程の一部が改正され、現行の学長からの表彰に加え、新たに学部長からの表彰に関し必要な事項が整備されました。

施行日は令和7年7月1日

総合医学研究機構核医学実験部門 放射線障害予防規程の一部改正

愛知医科大学医学部附属総合医学研究機構核医学実験部門放射線障害予防規程の一部が改正され、原子力規制委員会から指摘のあった事項(管理体制等)に対応するために必要な事項が整備されました。

施行日は令和7年10月1日

病床管理部設置に係る関係規則の整備

病院として最良のベッドコントロールを行い、目標である病床稼働率100%を達成するため病院全体の病床を一括管理し、効率的な入退院支援を実践する病床管理部を設置するため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和7年10月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院病床管理部規程

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院規程
- ・愛知医科大学病院医療福祉相談部規程
- ・愛知医科大学病院医療連携センター規程

編 集 後 記

☆ リリモツアーズ（関連記事 8 頁）ではドクターヘリの見学が行われ、参加した小学生は偶然にも出動及び帰還の様子を見学することができました。帰還するドクターヘリを見つめる小学生の眼差しは、夏の太陽にも負けない輝きを放っていました。

☆ 10月1日に事務組織の再編整備（関連記事 4 頁）が行われ、本誌の担当部署が総務広報課から広報課に変わりました。今後も皆さまに愛知医科大学の取り組みをご紹介できるよう尽力して参ります。

【広報課】

学報の送付を辞退される方は、広報課までご連絡ください。



X



Instagram

愛知医科大学公式SNS (@aichi_med_u) では
大学・病院の最新情報を発信中です。

愛知医科大学学報 第180号

発行年月日 令和 7 年10月31日

発 行 学校法人 愛知医科大学

発 行 人 祖父江 元

編 集 人 長谷川 洋

連 絡 先 〒480-1195

愛知県長久手市岩作雁又1番地1

愛知医科大学事務局広報室広報課

☎ (0561) 6 2 - 3 3 1 1 (代表)

☎ (0561) 7 6 - 1 1 8 1 (直通)